



Title	イギリスでの公衆衛生・国際開発学とネパールでのフィールドワークから学んだこと
Author(s)	濱渦, 華子
Citation	目で見えるWHO. 2025, 92, p. 18-19
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/102311">https://doi.org/10.18910/102311</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# イギリスでの公衆衛生・国際開発学とネパールでのフィールドワークから学んだこと



シェフィールド大学公衆衛生・国際開発学修士課程

The University of Sheffield, Master of Public Health International Development

濱渦 華子 (はまうず はなこ)

青年海外協力隊パラグアイ看護師隊員、在ホンジュラス日本大使館草の根外部委嘱員、長崎大学熱帯医学研修課程修了後、2023年より修士課程へ。

## 国際協力の現場で抱いた疑問

私は看護師として病棟で働いた後、20代の頃の夢のひとつであった世界一周をスタートし、1年間かけて28カ国を巡りました。途中スマホをすられたりもしましたが、たくさんの文化や人の優しさに触れ刺激的な日々を送りました。帰国後臨床に戻りましたが、今度は海外で看護師として働き私が恩返しをしたいという思いがあり、青年海外協力隊に応募しパラグアイへ派遣されました。現地の農村地域で主に非感染性疾患の予防に対する健康教育からソフト面の支援を学びました。ホンジュラスでは草の根委嘱員として保健ポストの改築や建設、医療機材供与などの案件を担当し、ハード面の支援から無償資金協力のプロセスを経験

しました。

これらの現場を経験する中で、どのような支援が効果的なのか疑問を持つようになりました。例えば、パラグアイでは座りがちな生活スタイル、野菜あまり摂取しないという習慣が根付いており、その文化を尊重しつついかに生活習慣病を予防できるか、という点で困難を感じました。またホンジュラスではボロボロの保健施設が綺麗に整ったとしても、その施設の医療者の質は変わらず、一方で医療者への技術協力を行ったとしても、必要な医療機材やサービスへのアクセスが整っていないと機能しないこともあります。さらに国連や様々な国の開発援助機関がある中で、お互いにより協働できる道があるのではないかと疑問もありました。私自身知識不足を痛感していたので、保健分野の国際開発の領域につい

て包括的に学びを深めたいと思い、公衆衛生学と国際開発学の両方の視点を学ぶことのできるシェフィールド大学院に留学することを決めました。

## 大学院での授業・生活

授業は秋学期と春学期に分かれており、夏にプレースメントの現場で修士論文のデータを取り書き上げるという流れでした。公衆衛生学ではグローバル公衆衛生、感染性疾患・疫学・ヘルスプロモーション、国際開発などを専攻しました。試験課題としてエッセイを書く科目がいくつかありましたが、最初は慣れないアカデミックライティングの書き方に苦戦しました。特に興味深かった科目は国際開発の思考と実践で、貧困が起こる事象について様々な理論があることを知りました。例えば従属理論という世界経済の発展が



写真1：SheffWHO委員会メンバーとWHO模擬会議に参加した学生たちとともに



写真2：ネパールの極西部に位置するリサーチサイトでインタビューのためコミュニティを歩く





写真3：赤レンガが特徴のキャンパス



写真4：大学からバスで20分で行くことができるPeak District National Park

なぜ二極化するのか、など初めて学ぶ領域ばかりで新鮮でした。しかしそもそも理論を批判的に議論したことがなかったので何をどう発言すれば良いのかわからず、クラスメイトや教授に後で質問したりしていました。

授業以外ではSheffWHOというWHOの模擬会議を年に1度実施する委員会があり、せっかく留学したのだからと思い切って応募した結果、運営側として委員会に所属することになりました。紛争や戦争が各地で起こっている中で保健システムを強化するというテーマを委員会メンバーで話し合い、「Health System Resilience in Armed Conflict」というテーマで決定しました。週1の委員会のミーティングではなかなか発言できずに落ち込むことは多かったですが、模擬会議当日はマンチェスターやロンドンの他大学からも学生が参加し活発な議論が行われ、最終的にとても有意義なものになったと思いました。

シェフィールドはイギリス国内でも緑が特に多い地域として知られています。バスで20分ほど乗ればPeak Districtという壮大な国立公園があり、試験期間が終わった後はクラスメイトたちとハイキングに行って緑に癒されていました。寮生活はエストニア・中国・アメリカ・イギリス出身の学生たち6名とキッチン・バスルーム共有という環境で過ごしましたが、シャワーは私以外みんな朝派だったので、夜混み合うこともなくストレス

は少なかったです。キッチンで課題をたまにみてもらったりしてかなり助けてもらいました。寮のすぐそばに24時間開いている大学の図書館があり、試験期間は早朝から深夜までもって必死に課題をこなしていました。

## ネパールのフィールドでの学び

不思議とネパールにご縁があったイギリス留学でした。1回目の渡航は3月に国際開発学のフィールドクラスで1週間滞在し、2015年の大地震で被害が深刻だったエリアでインタビューを行いました。私のテーマは震災後のメンタルヘルスケアサービスにおける障壁についてで、サービス自体はあまり活用されていないのが現状でした。そこにはネパールの仏教とヒンドゥー教の信仰心が住民同士の関わりを密にしていることで、精神的に支えられていることに関連しているのではないかとフィールドを観察することでわかる発見があり、宗教とはとても興味深いものだと思えました。

2回目の渡航は6月で修士論文のデータ収集でした。大学の連携している世界各地のプレースメントリストより研究場所を選択するのですが、保健分野のプロジェクトを実施していたのがGreen Tara NepalというネパールのローカルNGOでした。彼らの母子保健プロジェクトエリアであるネパールの極西部にあるバジュラ郡にて、遠隔地での産後ケアサービスの障壁について質的研究を実施

しました。首都からリサーチエリアまで陸路で4日間かけて移動し、暑さや運転の荒さから過酷な移動でした。しかし到着した時、標高約2000mに位置するその地域の景色に感動しました。サービス需要側である母親と、提供側である医療従事者や女性健康ボランティアなどに半構造化インタビューを実施し、産後ケアサービスにかかる障壁は何か探った結果、地理的・社会文化的要因が、サービス供給側と需要側の双方で浮き彫りになりました。特に興味深かったのは、チャウパディというヒンドゥー教の不可触という概念から、産後2週間ほど母子を隔離するという習慣がリサーチエリアで根強く残っており、無数のハエが群がる不衛生な暗い個室で隔離されている様子を実際に目にした時は衝撃的でした。NGOスタッフや現地の住民の人々に癒され、体力的にはきつかったですが貴重な経験を積むことができました。

## おわりに

公衆衛生学と国際開発学を組み合わせ、かつフィールドクラスがあるユニークなコースで学べたことで、グローバルな視点を広げることができたと思います。今回の学びによって、これまで国際協力のフィールドで感じた疑問や困難を包括的に考察することができ、今後さらなる課題解決に活かしていきたいと思います。